

さいたま市教組情宣

さいたま市
教職員組合
(埼教組)

TEL 641-6763
FAX 648-3567
e-mail
saitama@kyouji
ku-net.org

2005. 2. 2 (水)
No. 77

「なぜ今、教育特区なのかな?」

答えぬまま現場には押しつけ

一月十二日(水)、さいたま市教組は、さいたま市教育委員会と、教育特区の問題で交渉を行いました。市教組からは、前島委員長以下二十一名、教育委員会からは湯本指導二課長、山田調整主幹、竹井主任指導主事、望月教職員課長、川瀬副参事、金子調整主幹が出席しました。

特区申請の理由は

まず、交渉では、組合の要求書に対して、湯本指導二課長が特区申請の理由について次にように答えました。

【市教委】

現行の学習指導要領では、補完し得ない力を育てていきたいと考えている。指導二課には、保護者からの電話で、「子どもが何となくクラスでいやな思いをしている」「避けられている」という相談があった。また、長崎の事件の加害女児は、人間関係を構築する能力に欠けていたという見解もある。市内でも、日本刀

を学校に持ってきて、同級生にけがをさせるという事件もあった。人間関係をうまく作れていないという背景がある。どうやって人間関係を作ればいいのか、一つのスキルとして教える必要がある。

また、世界で活躍する子どもたちを育てるためには、英語で会話ができる、自分の気持ちを発表できることが必要ではないか、ということ。「潤いの時間」を行いたい。特区の申請は予定通り行っていきたい。

今、特区は必要ない

【組合】

「教育特区」を申請しないこと。現場では、人間関係が希薄になっている、ということとは十分に認識している。そのためのさまざま取り組みも苦勞しながら積み上げているところだ。現場の取り組みや成果を十分に掴まずに、トップダウンで人間関係プログラム云々という「教

育特区」を申請するというのは納得がいかない。

まず、申請前に内容の全体像を明らかにし、学校現場や市民に説明し、広く意見を聞くべきだ。また、市内の学校教職員に対し、実施計画、それに伴う予算措置等、もっと具体的に説明すべきである。

特区、ここが問題

【組合】

問題点をあげると、

一つ目は、総合的な学習の時間を確立するために、現場で努力してきたことを顧みずに、一方的に一八時間の人間関係プログラムを取ることを強要していることだ。教育行政が現場の声も聴かず一方的に「今の子どもたちに必要な力」として教育課程に組み入れたものを、強引に削減するというのは納得がいかない。

二つ目は、小学校三五時間、中学校一七時間の英会話を行うということだが、「英会話の前に行うことがあるのではないか」という論議もある。また、誰が教えるのか。事前の打ち合わせはどうするのか。教材はどうするのか。人や金の出所があるのか。全て現場任せになるのか。等々、現場では分からないことだらけだ。

三つ目は、市議会の三〇人学級請願の審議の際の答弁では、「教育は急には変えられない」と答弁しておきながら、特区はまさに急に出されたということだ。結局混乱するのは、子どもと保護者、教職員だ。行政は、現場の声をきちんと把握してから物事を進めるべきである。

ほっと

タイム



ロックソーランといえば、知らない人がいないほど有名。稚内南中学校で作られ全国に広まった。十数年前に稚内へ行きPTA会長宅に泊めていただき、話しを聞く機会があった。殺人以外何でもありの非行が吹き荒れた中、教職員と校長は様々な知恵を出し合い学校を立て直してきたという。会長さんは「先生たちも頑張ったけど、地域の人たちも学校を応援した。市長も教育長も胸を開いて、皆でどうしたらいいか真剣に考えた。」と語ってくれた。そんな中で、ロックソーランは生まれ今も受け継がれている。所違つてある所では「子どもが大変だから、特区を申請した。どういふものは後で説明する。とにかく言うとおりのやるように」という天の声(?)。教職員は信頼されていないらしい。こんなやり方が続けば、学校から「潤い」が消えてゆく。